苔の揺らぎに身を任せ、肌も溶け合う通し舟（上）

南海部　覚悟

「ーーーでも先輩、どうして東京じゃなくって京都なんですか？」
「福岡県警の本部長が聴き間違えたらしいの。警察庁官房長が電話で “都に帰す” って言葉をそのまま受け取っちゃったみたい・・・無理に意味深な表現を選ぶ、官房長もどうかとは思うけど。」
祇園祭 (宵山) の四条通りは、例によって浴衣に包まれた人の肌で見渡す限り渋滞しています。
どの肌も、今宵何かを期待して火照っているようで・・・・。
そんなことはお構いなしに、警備部からの応援要請で、私服警備を言い渡されたLGBTカップルの二人は、流石に浴衣姿という訳にもいかず、何時もの出で立ちで、周囲に無粋さを振りまいていました。
東京帰任を、幹部の言葉のあやで反故にされた悔しさから、二人とも多少いじけ切った気分なのは、致し方ありません。
「折角、博多で猛毒ドローンの事件解決して、一段落ついたら東京に戻ってグルメ三昧出来るって思ってたのに・・・。」
「そうね、銀座のピエールマルコリーニ・東京ミッドタウンのTOSHI YOROIZUKA・新宿のタカノフルーツバー・・・。」
「かんだやぶそば・駒形どぜう・すきやばし次郎・神田天政・・・。」
「ーーーあなた、やっぱり渋いのね。」

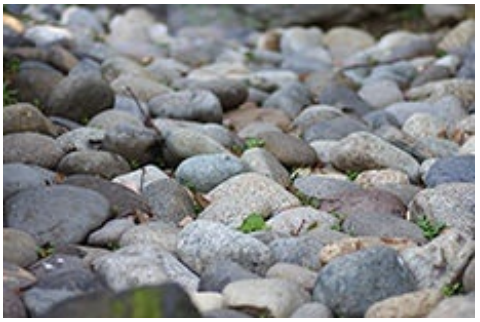
通り沿いの会所に繋留され、煌びやかな駒形提灯に彩られた各町自慢の山鉾から、賑やかな祇園囃子が奏でられて、それに合わせるように浴衣の肌が静々と四条通りの歩行者天国を流れます。
人々の流れをかき分けながら更に東に進むと、やがて鴨川のしっとりと冷涼な川風が、火照った肌を癒します。
「鑑識の “鳥の巣” 君も、一緒に京都なんですよ。」
「ーーー奥寺君のこと？口が悪いわね。」
「 “あの女医” さんとおさらば出来たのは、大正解なんですけど・・・・。」
「あら、穴見女医なら京都大学の非常勤講師で、近々着任らしいわよ。」
驚いて振り返った白河笑子の声をかき消すように、大音量の街頭演説が重なります。

ーーー憲法改正の国民投票は、いよいよひと月後に迫っていました。
三分の二の議席の維持が困難となった現政権が、衆議院の任期切れ解散の直前に、充分な議会審議を経ずして、国会発議を強行しました。
国民を二分した議論は、時に険悪な様相を呈しながら、主に街頭演説・討論会というステージで繰り広げられています。
この夜も、鴨川沿いの納涼床から、眼下の聴衆に向けて、賛成派・反対派双方の論者が演説を繰り返していました。
アルコールの入った河川敷の聴衆から、過激なヤジが飛び交います。
対岸のビルの屋上からも、複数の聴衆の気配がします。
其々の演説が終わり、ＴＶの実況が入ってパネルディスカッションに移ろうとしたその瞬間でしたーーー。

拡声器の声が唐突に切れました。
鴨川の上を予期せぬ静寂が包みます。
「納涼床のステージで何かあったみたい・・・店の奥から人が集まってきてざわついています・・・河川敷から足場をよじ登って、覗き込んでいる人がいます・・・・。」
橋の欄干に身を乗り出した笑子が、途切れ々に報告します。
甲高い女性の悲鳴に続いて、複数の怒号が河川敷から湧き起こり、納涼床を囲んでいた聴衆が南北二手に分かれて、一斉に何かを投げ始めました。
手で頭を庇いながら、笑子が逃げてきます。
「川の砂利石投げ合ってます！気を付けて！」
一斉に逃げ惑う群衆で、四条大橋の路上は忽ちパニックになりました。

「それで、その二人は此処でなにをしていたのですか？」
一夜明けた鴨川です、騒ぎのあった河川敷対岸の4階建ビルの屋上で、玲子と笑子のカップル、鑑識の奥寺の3人が、管理人に案内されて対岸の納涼床を見下ろしています。
「其処の手摺に掴まりはって、騒ぎを見ておした。注意しようと声を掛けさしてもろたら、酷くびっくりしはった様子で、怖い顔でわてを突き飛ばして、屋外階段を降りて行きはったんです。」
「この袋は？」
玲子が手摺の下の床に置かれた小さな革袋を指差します。
「そん時忘れはったんでしょう、小石がなんぼか入ってます。」
笑子が確かめると、ゴルフボール大の砂利石が、五つほど転がり出てきました。

対岸を見つめていた玲子がゆっくり振り返ると、「さあ、奥寺君実験よ！　笑ちゃん、納涼床と河川敷のスタッフにスタンバイさせて。」
「無理ですよ黒木さん、100ｍ以上ありますよ、通行人にでも当たったらどうするんですか？」
「何言ってんのよ、甲子園のベスト4までいったエースピッチャーでしょ！広範囲に規制線張っているから、通行人なんか近くに入れないわよ。さあ早く！」
笑子が携帯で連絡すると、納涼床の上に巨大なブルーシートが拡げられます。
玲子に無理に促されて、嫌そうな顔をしながらも、奥寺は皮袋の中の砂利石を掴むと2・3歩助走をつけて、大きく振りかぶって遠投しまします。
伸びやかな弧を描いて川を越え、砂利石は納涼床のシートに吸い込まれました。
「ナイスピッチング！今からでもプロ転向、遅くないんじゃない！」
管理人の方に振り返ると、「ーーー昨夜の騒ぎの直前に、納涼床の演説ステージに石が3個投げ込まれたんです。その後の乱闘は、聴衆の誰かが自分たちに投げられたものと勘違いして、投石が始まったようです。現場で投げ込まれた石の角度を検証したら、3個ともこのビルの方向になるものですから・・・騒ぎを見ていた二人組に、何か変わった特徴は？」
「そない言うたら、一人は中肉中背ごく普通の日本人どしたが、もう一人は明らかに外国人、黒人どした。背丈も日本人よりずっと高うて、手あいよがやたら細うて長いんおす、まるで蜘蛛みたいな体形どした。」
「この屋上には誰でも入れるんですか？」
メモを片手に笑子が尋ねます。
「とんかてあらへん、常時は正面のゲートをロックしておす。かてねえ、毎年この時期

になるとねえ、ほんまは迷惑しとるんどす・・・今月は祇園さん、来月は五山送り火でっしゃろ・・・近所の手前、そんな無粋も出来しまへんし・・・。」
「上がってくるのは、近所の方だけなんですか？」
「顔馴染だけなら全く問題あらへんのどす。古いビルで外部階段で屋上まで上がれるさかいに・・・管理人に一声掛けてもろうことで、黙認しとるのどす。」

京都府警刑事部長室です。
刑事部長の永山が肘掛椅子に深々と納まって、奥寺に質問します。
「河川敷から聴衆の誰かが、ステージに投石したんじゃないのか？」
「いくら下がっても角度的に無理です。納涼床の床は高さが4ｍ以上ありますから。」
「ーーーやっぱり対岸からか？」
「やっぱり対岸です。」
「黒木君はどうして人間が投げたと思うんだ？あの距離ならふつう機械を使うだろ。」
「試射も調整もなしに、いきなり初弾から標的に命中させているんです、100ｍ以上遠方からですよ。誘導でもしない限り、機械にはとても無理です。」
「標的ってスピーカーか？」
「3台設置されていた大型のコンサート用スピーカーが、3発の投石で見事に打ち抜かれています、標的はスピーカーに間違いありません。」
「動機は？」
「ーーーまだ不明です。」
ソファーに座っていた奥寺が、話を受けて続けます。
「考えられる投石機としては、ガス圧式・スプリング式・ゴムタイヤ式の3種ですが、電源も必要ですし、何れも重量がありますから、二人で屋外階段からビルの屋上に持ち上げるのは、不可能です。木製のスピーカーボックスを簡単に打ち抜いていますから、私なんかより遥かに球威のある投石者です。」
「乱闘で聴衆30人が怪我をしたが、その犯人に責任を取らせるわけにもいかんだろ、今のとこ器物損壊罪でしか訴追できんぞ。」
若手の刑事が、大慌てで部長室に駆け込んできました。

「また演説会が襲われました！京都駅の大階段で投石です！」

山科疏水沿いの閑静な住宅地に建つ、3階建て賃貸マンションの一室です。
疏水を見下ろす出窓に接して、カップルのベッドが置かれています。
ベッドに腰を下ろし、白い iPad を操作する玲子の袂に、全裸の笑子が横たわります。
「暑くないんですか先輩、昨日からエアコンの調子が悪くって全然冷えないんだから・・・。」
「だからって、年頃のレディが真昼間からスッポンポンで寝てて良いの？窓の外から覗かれたらどうするのよ・・・。」
「ーーーかまいませんよ、見たいなら大股拡げて見せてあげる！」
そういいながら、出窓カウンターの上に小麦色の臀部を持ち上げます、仰向けになって両足をＶの字に上げると、「オラ、オラ、オラ～！」
「やめなさい！」

青々とした葉桜の並木から、アブラゼミの歌声が幾重にも錯綜し、疏水の水面が灼熱の陽光を反射して、万物の色の輝度を上げる。
焼付いた路上を歩く者はなく、犬猫も息を潜めて物陰に微睡む・・・・まさに夏の深みの頂点です。

「ーーーでも、なんでスピーカーなんですか？今度も、京都駅の大階段に設置された大型スピーカー8台が標的だったでしょ？ステージには見向きもしないで、階段の上のデッキを走り回りながら、確実にスピーカーだけ潰していってます。」
「演説会場やターミナル駅の雑踏の中で、群衆を注目させるにはどうすればいいと思う？常時音が溢れているから、少々な声や音を立てても分からないわ。」
「音を無くすんですか？」
「一瞬、完全な無音が実現できれば、みんな足を止めると思うの。“何だろう！”て思うじゃない・・・それが目的かもしれない。」
「どういうことですか？」

「鴨川じゃ、直後に乱闘になって上手くいかなかったけど、今度は音が止まった瞬間、ステージのＴＶカメラが犯人の投石を見事に捉えたわ、複数の防犯カメラの映像や、近くにいた聴衆のスマホの動画も投稿されて、大変なことになってるんでしょ。」
「ネット上で犯人はスター扱いです。“スローイング・ネグロイド” とか “黒色の投石機” とか表現されています。」
「アメリカやヨーロッパに住んでる黒人とは違うわね。映像で見る限りビルの管理人が言ってたように手足が長くて背が高い、体の造りは寧ろ華奢でアフリカ中央部の原住民みたい、ひょっとするとまだ少年かも知れない・・・。」
「標的との間にいる聴衆を変化球で回避して、それも走りながら投げて命中させているんですよ。鳥の巣君から訊いたんですけど、腰を軸にして体の回転で投げる投球フォームは日本のピッチャーと同じなんだそうです、誰か日本人が教えたんじゃないかって云ってました。」
「でも、今のところ聴衆に死者やけが人がいなくて幸いね、もし頭に直撃したらヘルメットしてても助からないでしょうね。―――そんな事より気になることがあるのよ、ちょっとこれ見て！」
差し出された iPad には、デッキから逃亡する犯人たちを捉えた防犯カメラの映像が再生されています。
「二人ともロープで地上まで降下していますね―――。」
「専門家に映像を見て貰ったの、黒人の方は素人だけど、もう一人の方はちゃんと訓練された懸垂降下だっていうのよ。」
「安全帯（ハーネス）とエイト環（下降器）を使っているが、日本人らしい方が常に黒人をサポートしているって。残されたロープの結び目の写真を見せたら “ふたまわりふた結び” って特殊な結び方で手摺に固定されていたみたい。」
「じゃ、日本人の方は登山家かなんかですか？」
「消防レスキュー、警察P-REX、海保海猿、自衛隊レンジャーかなんかじゃない？」
その時、玲子の携帯にコールがありました。
「―――永山部長から、今度の件でＴＶ局の担当者が会いたいんだって。非番で悪いが出署してくれって・・・。」
「―――空調バッチリの府警本部、喜んで出署します！」

苔の揺らぎに身を任せ、肌も溶け合う通し舟 (上)

http://p.booklog.jp/book/115954

著者：南海部　覚悟
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/tumanaya/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/115954

電子書籍プラットフォーム：パブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社トゥ・ディファクト